

ウェスレーの神学と社会理解 *1

野村 誠

ウェスレーの神学思想から社会への働きかけを考察したい。彼の信仰は具体的にメソジズムの活動として受肉(incarnation)して表され、会員を組織して相互扶助の共同体を形成し社会的に活躍している。ウェスレー神学者R・マドックは、1998年の著書でキリスト教社会主義の原型は、抑圧され搾取されている人々、貧困、病者、囚人へのウェスレーの関心と牧会であったと述べている。^{*2} そこで彼の神学と社会理解について調べてみよう。

ウェスレーが伝道したこの時代の英国社会を一瞥する。18世紀後半、イギリスは多難な社会状況の中にあつた。国内は産業革命の渦中にあり、海外ではアメリカ独立戦争を戦った。この中で貧富の差は増大し、英国社会は近代化への過渡期で、社会的緊張は極度に高まった。本来ならば、暴力革命が起こるところであつた。事実、ゴルドン暴動(1780年)に示されるようにその動きはあつた。この中で彼は時代の状況に適切に対処し人々の信頼を得て、彼とメソジスト教会は、英国社会で認められていった。

1 ウェスレーの社会理解

保守・伝統的立場に立っていたウェスレーは、貧困は個人の怠惰、罪に起因するという考えに初めは同調していた。^{*3} しかし英国社会で伝道し、寝

食を各地の会員と共にすることで貧困は単純に個人の責任だけに帰すことができず、むしろ社会的不公平、不平等、環境の劣悪さ、不健康、不衛生、教育の欠如といった方面に目が向けられていくようになった。^{*4} すなわち人口増加や困り込み運動などにより、産業革命期の都市に流入し、貧民街のバラックの中で生活する人々や、炭鉱で働いている人々に貧困の個人的責任を求めるのは誤りであつた。貧困とそこから派生する諸問題を、社会全体が担うべき問題として彼は理解するようになり、社会悪をキリスト教倫理の視点から考察するようになった。産業革命の繁栄で社会的富が一部の人々に集中し、ウェスレーは社会的腐敗不正といった社会構造悪を問題としていった。

初期メソジストの会員は貧しかった。しかし説教「金銭の使用法」(Works IV・124~136)でウェスレーが「できるかぎり得よ」(Gain all you can)「できるかぎり貯えよ」(Save all you can)「できるかぎり与えよ」(Give all you can)と教え、会員は勤勉、節約に励み、その結果成功し豊かになった。マックス・ウェーバーが指摘するように勤勉、節約、正直といった倫理により多くのメソジストの会員が社会的地位を上昇し成功し豊かになっていった。メソジストの会員が成功し金持ちになるにつれ、宗教的に墮落することをウェスレーは恐れた。彼は1763年9月18日の『日記』で次のように記している。

月曜日の夕刻、「世をも、世にある物をも愛すな」との厳かな訓戒を、兄弟たちに与えた。これを愛する事は、彼らの大きなわざわいとなるであろう。それは、彼らは勤勉で節約するため、資産がふえるはずであるからである。その現象は、すでに現れている。ロンドン、ブリストル、その他多くの商都で、商業に従事している人々は、資産が7倍となり、ある人は20倍、100倍となっている。それで、彼らが持つべき重要な警告は、資産にからめられて滅びるな!ということである。

そこで彼は社会的責任を果たすためメソジズムの組織をとうして施すことを実践した。ウェスレーは金銭を悪とは考えていない。むしろ神は「貴重なタラントたる金銭をわれわれが管理するよう委託された」と主張した。^{*5} タラ

¹ この拙論は『共愛論集 第6号』(1996年)の「メソジスト教会の歴史と本質 3」などを基に、多少改め昨年の本学会で発表しさらに加筆修正したものである。

² R.L.Maddox, *Rethinking Wesley's Theology*, Nashville: Abingdon, 1998, p.22.

³ ウェスレーはトーリーで、国王神権説と受動的服従の倫理を説く保守主義者であつた。

清水光雄『ジョン・ウェスレーの宗教思想』日本基督教団出版局、1992年、84~85。

⁴ F.J.Macconnell, *John Wesley*, (New York: Abingdon, 1939) p.262.

⁵ 野呂芳男訳『ウェスレー著作集』新教出版社 1972年、5: 359。

ントたる金銭は神の執事としてのキリスト者に委託されたものである。そして神は貧しい者とともにいます方なので我々は神から委託されたタラントたる金銭を上手に管理し貧しい者に与えねばならないとウェスレーは確信していたと M・D・ミークスも指摘している。^{*6} 金銭(タラント)は貧しい人々に施すことを通して、その持ち主なる神に戻さねばならないと語った。そして慈善を通して、施す者も施される者も共にキリストの共同体の一員として社会連帯で結合され、施す者も貧しい者の中に同じ自らを見出すのである。施すことは、そのことを通して神の祝福を受ける「魂を死から救う手段」とウェスレーは教えていた(『著作集』V・374)。慈善はサクラメンタルな恵みの手段とウェスレーは理解していた。この考え方は、R・H・トーニーが正しく指摘するように中世キリスト教共同体としての総合の理念である。^{*7} ウェスレーは、中世キリスト教の有機的キリスト教共同体(Corpus Christianum)の理念を産業革命の近代社会への過渡期に、再現させようとしたのである。ウェスレーのキリスト教的社会理念から、メソジズムの博愛主義、人道主義などがでてくる。この理念に基づいて、メソジスト教会は、慈善事業・学校(Charity School)・日曜学校・医療福祉活動を行なった。

ウェスレーの政治的理念に目を向けてみよう。彼はパウロ的政治倫理を継承した。ローマ 13:1 をウェスレーは、「『権威は神によって立てられているもの』これは、『神に属するものとして、神に命ぜられるままに働く』と訳してもよい」と註解している。^{*8} P・グラソーも、ウェスレーはすべての権威は神に属するものと理解していると述べている。^{*9} そして政治家、議員を「神の代表者また代理人」と見なし、「彼らの権威は神の権威」と教えている(『新約聖書註解』)。ウェスレーは、1770年代に「権力の起源に関する諸考

察」(Thoughts Concerning the Origin of Power、Works XI・46~53)を出している。この中で、彼は J・ロックの人民主権型の思想と異なり、「権力は神にのみ由来する」(Works XI・53)という保守的立場を明示し、神が政府を建てたと考えている。^{*10} ウェスレーはトーリーではあるが、「名誉革命体制の完全なる支持者」で新トーリーであった(清水・85)。

ウォーナーによれば、メソジズムにおいて政治権威に対しては、服従と無抵抗が実行された。^{*11} メソジズムでは政治組織の目的を、宗教的自由や市民の保護者として肯定したのである(Warner・118)。安定した秩序の下でキリスト教倫理は働くこととウェスレーは考えていた。ウォーナーはウェスレーの政治倫理を次の二点に要約している(Warner・121)。

(1) 共同体の秩序の下で、良心の自由、個人の安全が保証される。

(2) 道徳的人格としての個人は、恒久的、社会的責任の気質が導びかれる。

ウェスレーは社会的諸問題を、社会秩序の下における道徳(Moral)の問題として理解していた(Warner・122)。彼の政治的保守主義はメソジズムを取り巻く社会的環境、変動の中で、会員が過激に走ることを抑制し、ゴルドン暴動(1780年)などの暴動に、メソジストを関与させなかった。説教者は会衆に「我らの王国は、この世のものではない」ことを語った。^{*12} なぜ、その政治的保守主義が重要だったかという点、ゴルドン暴動に参加した社会層とメソジストの社会層は同じであり、下層の人々が多かったからである。このゴルドン暴動後、メソジズムは落ちついた宗教運動と見なされ、メソジズムの社会的信用が高まり、その後会員が増加したのである。^{*13} というのは英国は、17世紀ピューリタン革命の反動により熱狂的で過激な宗教運動を恐れていたためである。

⁶ M.D.Meeks, 'Sanctification and Economy' in R.L.Maddox ed. *Rethinking Wesley's Theology*, p.83., p.91.

⁷ R.H.トーニー『宗教と資本主義の興隆』出口・越智訳、岩波書店、昭和49年。上巻51頁,111頁,下巻5頁,88頁他。

⁸ 松本卓夫・草間信雄訳『新約聖書註解下』新教出版社、1979年。

⁹ Peter Grassow, "John Wesley and Revolution: A South African Perspective." L. Maddox ed. *Rethinking Wesley's Theology*, p.189~190.

¹⁰ David Hempton, *Methodism and Politics in British Society 1750-1850*(London: Hutchinson,1983) p.43.

¹¹ W.J.Warner, *The Wesleyan Movement in the Industrial Revolution* (NY: Russell & Russel,1967) p.114.

¹² Arminian Magazin, vol XX. p.315, 1797年. Warner・126より引用。

¹³ Ralph E. Reed, JR., "From Riots to Revivalism: The Gordon Riots of 1780, Methodists Hymnody, and the Halevy Thesis Revised," *Methodist History*, April 1988 (Vol. XXVI Number 3), p.176.

政治的保守主義者であったウェスレーは一方でバランスを保っており、1772年の「自由についての諸考察」(Thoughts upon Liberty, Works XI・34～36)で個人の基本的自由を主張し「市民的自由、財産所有の自由」(Works VII・3, XI・42)を彼は表明している。

私は私の選択により、あらゆる点で自由に生きる。私の人生、人格、財産は安全である。私は何人の楽しみのためにも殺されず、不具にされず、拷問を受けることはない。私は投獄されず、手錠をかけられない(Works XI・42)。

ウェスレーは神より与えられた個人の権利としての自由の保証を主張しているとグラソーは語っている(Grassow・21)。

またウェスレーの自由の中には、寛容があったことも加えておかねばならない。主イエス・キリストを信じるならば、その人の意見がどのようなものであろうと受け入れるべきことを述べている(『著作集』IV・470)。しかし、彼はカトリック教徒に対する寛容は拒否していると清水は指摘している(清水・90)。カトリックに対する不寛容は、外国からの支配に対する反対に基づくものである。しかしウェスレーはロックの市民的自由の思想を、新トーリーとして継承している。このことを清水は、次のように論述している。すなわち「彼らは他のいかなる国民にも知られていない、偉大なすばらしいものを現実に享受している。つまりそれは市民的自由、財産所有権の自由である」(civil liberty, a liberty of enjoying all our legal property)。ロックが統治の究極目標とした「所有権」の保全が名誉革命以降の英国の王制下において現実に実現し、それまでに体験したことのない宗教的、政治的自由を英国国民が享受し、世界の模範になっているとウェスレーは語る。現実として彼の政治思想とアルミニアニズムとは共存したのである(清水・85)。ウェスレーの政治理解は、彼のアルミニアニズムの神学に由来するものであると清水が指摘することは正しいと思われる。

ウェスレーはキリスト教を個人の救済だけでなく共同体社会の救いの宗教と信じていた(『著作集』IV・7～13)。*14 従って中世の有機的キリスト教社

¹⁴ J. Wesley Bready, *England: Before and After Wesley* (London: Hodder & Stoughton, 1939), p.202.

会を、都市化と産業革命の進む中で再興しようとしたのである。彼は英国社会の問題を深く理解し、宗教復興によって様々の危機から英国を救おうと意図し、キリスト教道徳をその中心に位置づけたと言えよう。そのウェスレーの社会理念は、J・W・ブレーディの見解によればフランス革命(1789年)より50年早く、「自由、平等、友愛」(Liberty, Equality, Fraternity)に要約される(Bready・205)。ところがウェスレーは、この「自由、平等、友愛」を「神の国」(the Kingdom of God)の理念に位置づけたところが、フランス革命と異なっている。彼が提唱した自由は、イエス・キリストの復活の力による罪と死からの自由であり、人は神の前では罪人であり等しく神の恵みを必要としている平等であり、友愛は父なる神の下での人種を越えた愛を教えたのである(Bready・1)。ウェスレーは、霊的な宗教的な社会、つまり「神の国」を理念とする社会を描いていたのである。それは具体的には、ウェスレーと年会を中心にしたコネクショナル・システムであり、個人の内面の回心に基づきメソジストたちは強力な組織に統合された宗教組織であった。*15 すなわち、救済の対象を個人から社会に拡大したものであった。

エモリー大学教授ラニアンは、ウェスレーは個人の聖化ばかりでなく社会の聖化をめざしていたと述べている。*16 D・ミークスはウェスレーの社会に対する神学的視点は *oikonomia* であり分裂しかけた共同体社会を統一させ総合的に救済しようとしていたというのである(Runyon・83～91)。社会は彼の sacrament 論を教会の外に拡大させたものであった。*17 そして社会共同体を聖化し救済すべく理解した。まさに中世キリスト教の有機的キリスト教共同体の理念を産業革命の近代社会への混乱した過渡期に、新しく再現させようとしたのである。

2 社会的活動

¹⁵ 矢崎正徳『18世紀宗教復興の研究』福村出版、1973年、232頁。

¹⁶ Theodore Runyon, *The New Creation*(Nashville:Abingdon 1998)p.112, pp.163-164.

¹⁷ J.E.Rattebery, *Wesley's Legacy to the World*(London: Epworth, 1928), p.6, 167.

ウェスレーとメソジスト教会が社会的活動として力を入れた具体的な事柄
監獄改善、奴隷解放、禁酒と公衆衛生をとりあげたい。

監獄改善

18世紀英国では、犯罪法と刑務所の管理が不適切で悪名高かった。この問題は、その時代の人道主義者の関心を引いた。この監獄改善運動に、ウェスレーは初期のころから、ホーリークラブ（オックスフォード大学時代）のころから関わっている。^{*18} 彼らの目的は囚人を訪問し監獄の状況に人々の関心を向けることにより監獄を改善することだった（Warner・237）。英国の当時の監獄は、男性も女性も子供も一緒に詰め込まれ不潔と絶望の場所であった（Bready・367）。ウォーナーの調査によれば、ウェスレーはある時期、9カ月間で67回監獄で説教を行ない、他の仲間も監獄を訪問し、無実の罪で刑に服している囚人の解放にも努力したのである（Warner・237）。また1761年1月2日のThe London Chronicleの新聞に、ウェスレーは、Bristol Newgateの監獄の状況について投稿し、それが以前より「清潔で心地よく」なっていることを書いている（Bready・131）。しかし、もっとも監獄改善が進んだのは、John Howardが1773年にBedfordshireの司法長官に任命されてからであった。彼は英国の監獄を調査し、改善を実施していった（Bready・131）。この監獄改善は、長い間ウェスレーと友人たち、そして巡回説教者達が訴え、イギリス大衆の社会的良心（social conscience）が覚醒させられた結果であった（Bready・367）。

奴隷解放

英国ならびに米国での奴隷解放運動は、すでに17世紀からクエーカー教徒によって組織的に指導されていた。そして英国では18世紀のメソジスト教会の影響下で広汎な民衆運動に発展した。^{*19} 例えば、歴史神学者J・ニコ

ルズは、メソジズムが奴隷制廃止に多大な貢献をしたことを高く評価している。^{*20}

英国政府が、奴隷解放を政策として定めた時期について、結論から述べよう。英国で黒人奴隷の貿易が禁止されたのは1807年、英国全土で奴隷が解放されたのは、1833～34年であった。この奴隷制廃止に政治家として活躍したのは、トーリー党のウイバーフォース（William Wilberforce, 1759年～1833年）であり、彼をウェスレーが応援していたことも有名な事実であった。

^{*21}

メソジスト教会とその運動が、果たした功績の一つに数えられている奴隷解放運動は1741年から1770年までの前期と1771年からの後期にウォーナーは分けて理解している（Warner・239）。そこで我々もウォーナーの理解に従って、前・後期に分けて考えたい。まず前期の30年間について取り上げてみよう。この時期は、ウェスレーのアメリカ伝道以降である。この前期、彼は、この運動の流れの外におり、学びの期間であった。この時、J.ホイットフィールド（Whitefield）とハンティングドン（Huntingdon）伯爵夫人のリーダーシップの下で奴隷解放運動のグループが活躍していた。そして1770年のホイットフィールドの死後、ウェスレーがこの運動を引き継いだのである（Warner・241）。

次にウェスレーが本格的に奴隷解放運動に取り組んだ後期、1771年以降を考察しよう。1771年以降、奴隷問題は、道徳的、政治的問題となり、ウェスレーの明確な指導の下で展開されていった。1772年には奴隷貿易反対運動が大衆運動として盛り上がった。すでに紹介したが1772年2月12日のウェスレーの『日記』にクエーカー教徒のアンソニー・ベネゼットの奴隷制反対の著作を彼が読み、深く感銘を受けたこと、さらに奴隷制廃止に向けて活動していく決意を記している。

彼は1774年に有名な「奴隷制への諸考察」（Thoughts upon Slavery）とい

¹⁸ 「ウェスレー日記」1730年8月24日に、チャールズとウィリアム・モルガンと共に刑務所をしばしば訪問したと記している、日記の他の所にも監獄訪問の記事、囚人と交流している。

¹⁹ Warren Thomas Smith, *John Wesley and Slavery* (Nashville : Abingdon, 1986) .

²⁰ J.H.Nichols, *Democracy and the Churches* (Philadelphia : Westminster, 1951) , pp.70～71

²¹ ウェスレーは、1791年2月24日、死去6日前に最後の手紙をウィルヴァーフォース宛てに書き、奴隷解放運動を励ましている。

うパンフレットを出版した (*Works XI*・69~79)。このパンフレットは、当時もっとも効果的な奴隷制告発文書の一つとして、この問題に関心の低かった人々を広く啓蒙した。この文書は、ウォーナーの見解によれば「宗教的な根拠によって奴隷制が考察されただけでなく、人道的同情、政治的権利、経済的効率からも否定された」(Warner・242)。しかし、なによりも奴隷制は罪悪なのである。このパンフレットの中でウェスレーは、人間の所有する基本的権利としての自由について考察している。

人が空気を呼吸するようになるやいなや、自由はすべての人の権利であって、どのような法も、人が自然法から得た権利を奪うことはできない (*Works XI*・79)。

アメリカ独立戦争 (1775 年) が始まるころ、リパプールの港には、136 隻の奴隷運搬船があったという (Bready・102)。この船をウェスレーは、説教に来る毎に目にしていた(『日記』、1777.4.4)。黒人奴隷は、アフリカから英国領土の新大陸アメリカのプランテーションに輸送され、三角貿易が英国、西アフリカ、アメリカとの間で行なわれ、英国の奴隷貿易は、巨大な利益を生んでいた (Bready・103)。

ウェスレーは、アメリカ独立戦争の渦中 1777 年に「国家の状況を顧みて英国国民に真剣に告ぐ」(A Serious Address to the People of England, with regard to the State of the Nation, *Works XI*・140~149) を書き、翌年出版している。この中で奴隷貿易と奴隷制を批判し、その罪悪の故に英国は神の祝福を受けられず、破滅に瀕している。まさに奴隷制は、「鈍感さ、恥知らず、愚かな神への冒瀆がイギリス人の真の性格である」(*Works XI*・148) と告発している。かくして説教、パンフレット、アルミニアン・マガジンなどを通してメソジスト教会の会員は、奴隷制廃止について啓蒙された。その結果奴隷制廃止の訴えは広く大衆運動となり議会で嘆願書が提出されるにいたった。そして 1780 年のメソジスト教会の年会は、奴隷制に反対して断食し、祈ることを決定し、奴隷によって作られた製品の不買運動が広がり、多数のメソジストは所有していた奴隷を解放した (Warner・242~43)。

そして 1780 年アメリカ・メソジスト年会は、奴隷所有は、神と人の法に違反することを宣言した (Nichols・70)。この奴隷制廃止運動は、メソジズム

の研究家ラッテンベリーの見解によれば「福音主義運動の直接の結果」であり、*22 イギリスの奴隷解放に尽した政治家のウィルバークフォースが議会で活躍したのも、その時代のメソジズムの運動に支援された結果であった。この奴隷解放運動は、メソジズムの宗教復興運動による博愛主義、人道主義という時代精神の涵養によって支持されたものであったとウォーナーは主張している (Warner・246)。

監獄改善と奴隷解放運動は、宗教復興としてのメソジズムによる社会的良心の覚醒と博愛主義の涵養、社会的道徳 (social virtue) の向上が引き起こした結果であった。

ウェスレーが伝道した 18 世紀の中ごろは、「ジン時代」(the Gin Age) と呼ばれるほどであった。ジンの飲酒は 18 世紀の始めから流行し、同世紀中ごろに最盛期に達した(Bready・145)。それは「英国生活の大いなる呪胆 (the master cure of English life) として、他の社会的害悪同様に見なされていたのである。18 世紀も中頃になると飲酒はいよいよ盛んになり、ロンドンの St.Gile 地区 (現 Holborn) では、2000 軒の家のうち 506 軒が、ジン・ショップであり、さらに 82 軒が娼家でジンが主な飲物であった(Bready・146)。ジンはいたる所で売られていた。人々は飲酒のため借金を重ね、それゆえ飲酒は多数の犯罪、罪悪の温床となっていた。当時の飲酒についてベンジャミン・フランクリン (1706~90 年) が『フランクリン自伝』の中で体験を記しているのでよく知られている。*23 しかし、「ジン時代」はメソジズムを中心とする福音主義の宗教復興運動や社会の自覚によって 1751 年には、最盛期を過ぎていった (Bready・149~150)。それでも、ジン・ショップとギャンブルにまつわる大衆の道徳的墮落は、18 世紀英国産業革命の「時代精神」(Zeitgeist) であったとブレイディは評している (Bready・168)。この状況の中で、ウェスレーが飲酒を禁じたことは、適切かつ妥当なことであった。この禁酒の実行については、18 世紀を通してウェスレーは絶えず戒めている。禁酒の問題は同時に公衆衛生の問題でもあった。

²² J.C. Rattenbury, *Wesley's Legacy to the World* (London : Epworth, 1928) p.223.

²³ ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳、岩波文庫、1957 年。

18 世紀後半メソジズムが普及する所に公衆衛生の影響が出ているので取り上げたい。ウェスレーが出版した有名なパンフレット「Primitive Physicks, or An Easy and Natural Method of curing Most Disease」(1747 年)を中心に考察する。長いので略して『原始医術』と記す。メソジズムが広がると禁酒と清潔が広がっていった。ウェスレーは、「清潔の欠如は、すべての宗教にとってスキャンダルである」(Works VII・123)と教えている。彼は、公衆衛生を宗教的に意義づけたのである。

ウェスレーが出版した『原始医術』には批判もあるが、貧しいメソジストの会員にとって手頃な頼りになる書物であった。また保健衛生の意義を宗教的に支える働きをな清潔を広めた。この清潔は、幼児死亡率の変化として顕著に表われたとブレイディは報告している (Bready・142)。ロンドンでは、メソジズムの宗教復興が起こる前、4 入のうち 3 人の幼児が 5 歳までに死亡し、その死亡率は 74.5%であった。ところが 18 世紀の半ばを境に、清潔さの普及と共に幼児死亡率は以下のように変化している。

100 人中 5 歳までの死亡率・時期

1730～49 年	74.5%
1750～69 年	63.0%
1770～89 年	51.1%
1790～1809 年	41.3%
1810～29 年	31.8%

(Bready・142)

幼児死亡率が 100 年間に 74.5%から 31.8%に低下したことは劇的な変化である。ブレイディは統計に表われない幼児死亡率はもっと多かったと見ているが、メソジズムの影響の結果、衛生環境が著しく改善された成果と考えられている。ともかく、ウェスレーの宗教復興の成果が、上記の改善を呼んだと言ってよいだろう。ウェスレーとその説教者たちは、聴衆に禁酒、清潔を説き、ギャンブルを禁じ、魂のみならず肉体の聖化を説いたからである。その中で『原始医術』は重要なパンフレットであり、多数印刷され、読まれ

た。ウェスレーと説教者たちは、その時代の人々が無知と悪徳、不潔と悲惨の中で、半ば野蛮に暮らしているのを知り、協力し合って有益で清潔に生活することを教えた (Bready・266)。17 世紀の推定平均寿命は 40 歳前後であったが、産業革命と都市化は、一般都市労働者の寿命を悪化させた。^{*24} たとえば 1830～50 年の労働者とその家族の平均寿命は 16～20 歳と推定されている (村岡／川上・135)。産業革命期の労働者の一日の労働時間は 13～14 時間以上であり、住宅環境や衛生状態は劣悪で疫病が蔓延し絶望的環境の中で飲酒とギャンブル、刹那的享楽にふけるなかで人々は暮らしていた。彼が、人々に自助 (Self-help) と相互扶助 (Mutual service)、清潔を教えたことが、メソジズムの顕著な特色となり、「清潔さと秩序、家庭の心地よさ」が宗教復興のあとに残された (村岡／川上・135)。個人の清潔、節制、聖化、家庭の清潔、家庭内の衛生が、宗教復興の結果として表われていった。清潔さは、怠惰の対極にあり、不潔故に失われていた自尊心、独立心を取り戻し健康な体と魂を回復していった。ブレイディは、英国史において死亡率の低下と公衆衛生の改善は、宗教復興の進捗と、時間的にもまったく同時であると指摘している (Bready・321)。禁酒を含む、道徳的モラルの回復が公衆衛生にまでつながったのである。そういう意味でウェスレーはその時代の偉大な教育者であった。

禁酒と公衆衛生、家庭の清潔は、女性の協力を得ずに出来ないことであり、女性の支援があったことは明らかである。^{*25}

3 社会への審判と神の救い

ウェスレーは英国社会の罪悪に対する神の審判としての災いと神の救いという視点から社会倫理を考察している。ウェスレーのパンフレット「A Seasonable Address to the Inhabitants of England」では、英国を襲った不幸の原因を、英国国民の罪に見出し、「我々は、長い間ソドムやゴモラのようなであった」と英国国民に反省を促し、神だけが、英国を救うことが出来るので、

²⁴ 村岡健次、川上稔編著『イギリス近代史』ミネルヴァ書房、1986年、939頁。

罪を悔いて、神に帰るべきことを説いている (*Works XI*・123)。英国の犯した罪の故に蒙っている裁きが、この災害であると彼は説いている。

しかし、すべての身分、階級の人々にあらゆる罪悪が豊かにあることは明白である。それで我々が剣で罰せられる時、我々の国民の一つの主なる罪は、我々がアジア、アフリカ、アメリカで流してきた血であることは否定しがたい。……アフリカの貿易は、まったく不正である。それは血の代価である！それは血の貿易であり、我が国土を血で汚したのである (*Works XI*・125)。*26

ウェスレーは、英国国民の不信心、罪悪、奴隷貿易、奴隷制、海外での流血の故に「神の怒り」、神の裁きが下っていると訴えている。各人が悔い改め、神と和解しなくてはならない。そして罪を改めない間、平和はないとウェスレーは説いている (*Works XI*・126)。いずれにしろ彼は英国にはびこる不道德、奴隷制、産業革命の中での搾取、賭博、不正といった罪悪、海外での侵略・略奪などの罪を認識し、神の前に悔い改め、神との和解を得なくてはならないことを訴えている。彼の国家や社会の理解は聖書の解釈から次のように要約されている。

聖書は、偉大な王国の興亡の説明を十分私たちに示している。

それは正に次のことである、国家は美德 (virtue) によって興こり、悪徳によって滅びる。「正義」のみが「国家を高め、罪はどんな国家にも非難叱責となる」 (*Works XI*・125)。

ウェスレーは、産業革命、アメリカ独立戦争という深刻な社会状況の中で、英国国民に宗教的指導者としてきわめて適切な意見を与えたと言えるだろう。アメリカ独立後、その独立をウェスレーは尊重し、再びアメリカのメソジスト教会の復興に力を尽した。すでに紹介した「A Seasonable Address to the Inhabitants of Great Britain」の中で「国家は美德によって興こり、悪徳によって滅びる」と彼は主張していた。社会そして国家を支えているのは、道徳 (moral) であり、美德 (virtue) であると彼は確信していた。ウォーナーによれば、メソジストは「市民社会に存在する全ての悪は、共同体の中の個

人、団体、支配者の道徳的責任の否定に起因する」 (Warner・119) と確信していたのである。そしてウェスレーは、国民の不幸は「贅沢や、経済面の怠惰、市民生活での欺き、詐欺、不道德と政治の無秩序な扇動」 (*Works XI*・125) に起因すると考えた。すなわち「市民生活の統合性は、ただ道徳的基盤の上にある」 (*Works XI*・120) ののである。

ウォーナーによれば 18、19 世紀のメソジズムの成功は、人格的性格の変革による個人の社会復帰であり、それは宗教的共同体の相互扶助による連帯とその構成員の教育による「責任ある性格形成」であり、産業革命期の混乱の中で、社会秩序の回復による個人の活性化にあるのであった (Warner・275～280)。この運動の特色は、自由主義を社会の中で培ったが、同時に極端な革新思想を排除した。さらにメソジズムは、産業革命の中の搾取機構と屈従を自主独立、相互扶助により拒否し、市民中産階級を形成していったのである (Warner・277)。

神学者の E・トレルチもメソジズムと近代市民社会の形成の関連に着目している。トレルチは『プロテスタンティズムと近代世界』の中で、プロテスタンティズムのメソディスト派を含む諸分派が、近代社会を形成する貢献を果たしたと唱えている。「それらの分派が、イギリスやアメリカにおける市民的中産階級の創出にあずかって大きな力を発揮した」という見解を展開している。*27 トレルチはメソジズムを「近代のキリスト教の歴史のみならず、近代の精神的展開において最も重要な出来事の一つであり、全く個人主義的に強調された形における正統的キリスト教の再生」と把握している (『トレルチ著作集』IX・49)。つまり近代社会におけるキリスト教の伝統の再生復帰である。そしてトレルチはメソジズムの社会的意義を次のようにまとめている。

メソジズムは、無力な、まさに工業化によっておちぶれた大衆の中にある人格性と個人性への欲求を導き、慈善活動によって彼らを困窮から助け出した。その他の点についていえば、その倫理は、回心の感情的性格をますます組織的に規律化した聖化倫理および広範な職業倫理とによ

*25 『キリスト教史学』1994年 第48集の拙論を参照。

*26 矢崎正徳も前掲書 127頁でこの個所を重視している。

*27 E. トレルチ『プロテスタンティズムと近代世界』1・2、『トレルチ著作集』8.9. 卷所蔵、ヨルダン社、1984年、8巻109頁。

つて補完したものであるが、それは徹底して国家や社会を保守しようとするものであった。選挙法の改正、奴隷の解放、博愛事業、しかしまた厳格な安息日の聖別、近代の教育、学問、芸術に対する闘争は、社会問題に対するメソジスト派の立場を特徴づけている（『トレルチ著作集』IX・53）。

すなわちキリスト教の倫理である社会的良心、道徳的責任感や、社会正義、博愛主義、人道主義といった精神をエートスとするメソジズムは、矢崎正徳が正しく指摘するように「国民的良心の具像化」である（矢崎・280）。

しかし、なぜこの運動を担った人々が、かくも向上したのかその根本的原因は、ウォーナーも述べるように不明であり、ウォーナーの表現を借りれば「神秘的力が人々に社会的動機を与えた」（Warner・281）としか言いようがないのである。ウェスレーとメソジズムから多くのことを学んだ²⁸ 賀川豊彦は霊の力、「神の力」が共同体で抑圧されていた人々、周辺にいて見失われた人々に与えられたと表現している。²⁸ J・E・ラッテンベリーはサクラメントによる神秘的神の恵みを再発見し、ウェスレーの社会共同体の理念はキリストの体としての教会の拡大であり、聖餐式の具体化であったと理解している（Rattenbury・167）。あるいはコリンズによれば、神の恵みは祝福と力として人々に与えられたのである。²⁹ またJ・カブは、神の恵みに対する応答としての愛が働き、人々を聖霊の働きにより変えたと言っているのである。³⁰

この考察のまとめとして他のどのような学者のことばより、ウェスレー自身のことばを引用してしめくりたい。彼は晩年、次のように回想している。

この40年から50年の間、神がその民になされたことを思う時、彼らが救い主なる神を真に愛し讃え喜んで燃えていたことを思う、彼ら全員は、この世にあって天使のように生きていることを信じていた。そして彼らは絶えず見えないものを見ながら歩み、父と子との絶え間ない交わりを持ち、永遠においてあり、歩んでいることを期することができた。

（Works VII・21）

²⁸ 賀川豊彦『賀川豊彦全集』キリスト新聞社、昭和37年、3：323頁。

²⁹ Kenneth Collins, *The Scripture Way of Salvation* (Nashville: Abingdon., 1997).

³⁰ J.B.Cobb, Jr., *Grace & Responsibility* (Nashville: Abingdon.1995), p.139.

メソジストの会員は困難な社会のなかで神を見ながら（Visio Dei）三位一体の神の交わりの中に祝福されて神とともに喜んで歩んでいた（Unio Mystica）とウェスレーは語っている。³¹

ウェスレー神学の受肉（incarnation）としての具体的あらわれが社会的活動であり、神の恵みはサクラメンタルな「恵みの手段」をとうして豊かにいきいきと人々に伝わり、見失われていた人々を「キリストの神秘的体なる教会」（copus Christi mysticum）に回帰させ再生させたのである。

（共愛学園 前橋国際大学助教授）

³¹ ウェスレー神学のサクラメンタルで神秘的な思想については拙著『ウェスレーの神学思想』白順社、1998年を参照してください。